

# 現代中国語の再帰表現における 受身文への適性に関する一考察 ——「身体部位 N + 被 + Na + VP」形式を中心に——

日下部 直美

## 0. はじめに

日本語では「手を叩く」、「手を振る」、「舌をかむ」といった、動作主が動作主自身の身体部位に対して行う動作（行為）である所謂「再帰表現」<sup>1</sup>は、まともの受身文（直接受身文）<sup>2</sup>を形成しないという（以下の（0-1）～（0-3）、（0-1）’～（0-3）’は仁田 1982:87 からの引用。体裁は引用者による）。

（0-1）子供は手を叩いて喜んだ。

（0-2）彼は、こちらを向いて、手を振っている。

（0-3）あわてて御飯を食べたので、舌をかんでしまった。

（0-1）～（0-3）を直接受身文にしたものが下の（0-1）’～（0-3）’であり、これらはいずれも成立しない。

（0-1）’ \*手が子供に叩かれた。

（0-2）’ \*手は彼によってさかんに振られている。

（0-3）’ \*あわてて御飯を食べたので、舌がかまれてしまった。

次に、現代中国語の例を見てみよう。

（0-4）我招了招手，叫他过来。[私は手を振って、彼を来させた]

（0-5）他点了两下头。[彼は二度頷いた]

（0-6）她眨了眨眼睛，又看了一遍。[彼女は瞬きをして、もう一度見た]

上に挙げた（0-4）～（0-6）の“招手”、“点头”、“眨眼睛”は全て再帰表現で

あり、これらを“被”構文にすると、日本語の (0-1)’ ～ (0-3)’ の場合と同様に非文となる。

(0-4)’ \*手被我招了招，叫他过来。

(0-5)’ \*头被他点了两下。

(0-6)’ \*眼睛被她眨了眨，又看了一遍。

しかしながら、以下の (0-7) ～ (0-9) の“刮胡子”、“切手指”、“梳头发”も再帰表現であるが、これらは (0-7)’ ～ (0-9)’ のように“被”を用いた表現にした場合に、自然な文として成立するものもあれば、やや不自然なものもある。一方、日本語の場合は (0-7)’ ～ (0-9)’ の例文訳のように、全てかなり不自然になってしまう。

(0-7) 两天中 {我 / 他} 刮了三次胡子。[二日間では私は三回髭を剃った]

(0-8) 昨天做饭的时候，{我 / 他} 不小心切了手指。

[昨日料理をしている時に、{私 / 彼} はうっかり指を切ってしまった]

(0-9) {我 / 他} 梳好了头发，走吧。

[髪をちゃんと梳いたから、行きましょう]

(0-7)’ 两天中胡子被 {我 / ? 他} 刮了三次。

[二日間で髭は私によって三回剃られた (→ …髭を私は三回剃った)]<sup>3</sup>

(0-8)’ 昨天做饭的时候，手指被 {我 / 他} 不小心切了。

[昨日料理をしている時に、指は {私 / 彼} によってうっかり切られてしまった (→ …指をうっかり切ってしまった)]

(0-9)’ 头发被 {我 / ? 他} 梳好了，走吧。

[髪は毛は私によってちゃんと梳かれたから、行きましょう  
(→ 髪をちゃんと梳いたから、…)]

木村 1992 は、対象への「影響含意度」<sup>4</sup>によって、受身文への適性が決定

され、「他動性の高い VR 構造を頂点として、低い動詞へと移るにつれて次第に劣っていく」(p.11)と指摘しており、(0-4)' ~ (0-6)' が成立せず、(0-7)' ~ (0-9)' が成立するのは、このことが原因であると考えられる。しかしながら、(0-7)' と (0-9)' の動作主が“我”の場合は自然な文として成立するが、“他”の場合はやや不自然となる。

本稿では、「V + 身体部位 N」形式 (V は動詞、N は名詞) の再帰表現において、その“被”構文への適性を他動性の観点から考察するとともに、人称の差異による話し手の視点及びシチュエーションがその適性に影響を与えていることを明らかにする。再帰表現の受身文としては「身体部位 N + 被<sup>5</sup> + Na + VP」の形式 (Na は動作主) を取り上げ、身体部位 N が動作主自身の身体の一部であるものを考察の対象とする。人称については、動作主が一人称の“我”と三人称の“他 (她)”の場合を比較し、話し手と第三者という観点からも分析を試みる。

## 1. 再帰表現と他動性の高低

現代中国語における再帰表現の他動性の高低について、日下部 2008a では以下の 3 つのパラメータを設定した。

(i) 動作主の意志性

(ii) 対象物は変化を被る

(iii) 対象物の被影響度

(日下部 2008a:122)

(i)、(iii) は Hopper and Thompson 1980、(ii) はヤコブセン 1988 の基準を導入したものである。日下部 2008a では、これらの特徴が多く備わっているものは他動性が高く、少ないものは他動性が低いとした上で、再帰表現を他動性の高いもの (A)、高いものと低いものの中間に位置するもの (B)、他

動性が最も低いもの (C) の3つのグループに分類した。

- (A) 剪指甲 [爪を切る]、刮胡子 [髭を剃る]、拔牙 [歯を抜く]、  
切手指 [指を切る]
- (B) 梳头发 [髪をすく]、洗手 [手を洗う]、刷牙 [歯を磨く]
- (C) 眨眼 (睛) [瞬きする]、点头 [頷く]、歪嘴 (巴) [口をゆがめる]、  
伸腿 [足を伸ばす]、招手 [手を振る、手招きする]、  
抱胳膊 [腕組みをする]

(A)、(B) 類は、いずれも身体部位の状態が変化するものである。この「状態変化」という特性は、(A) 類については、身体部位が動作主である主体から「分離」しているため、身体部位の状態が変化しているといえる。(B) 類においても、動作主が身体部位に対して働きかけを行った上で、当該の身体部位の形状または表面の状態そのものを変化させるということである。更に、(A) 類については、身体部位が「分離」し、動作主である主体から切り離された別個のモノとして認識されるため、対象物である身体部位の被影響度は全体的であると見なすことができる。また、(A) 類の“拔牙”、“切断手指”と、(B) 類の“刷牙”、“洗手”といったように、同じ身体部位に対する動作（行為）であっても両者は異なり、(B) 類の場合は、身体部位の表面及び形状の変化のみであるため、対象物である身体部位の被影響度は部分的であるといえる。

(C) 類の“眨眼 (睛)”については、対象物である身体部位の変化及び身体部位の被影響度はないと考えられる。“点头”、“招手”、“抱胳膊”、“歪嘴 (巴)”、“伸腿”においては、身体部位の空間的位置に変化が生じているのみで、(A) 類、(B) 類と比較すると、身体部位そのものに対する被影響度は見られない。张伯江 2000 : 34 は、「物質運動のプロセスは「位置の移動」のプロセスのみならず、一つの「状態変化」のプロセスでもある」と指摘している。「状態変化」

という特性は、動作主が刃物や櫛等といった「道具」を用いて当該身体部位に働きかけ、その身体部位を分離させる、または表面や形状を変化させることにより、動作（行為）前の状態から動作（行為）後の状態に移行させるということであるため、「空間的位置の変化」より他動性が高いと判断される。従って、(B) 類と比較すると、(C) 類の方が他動性が低いといえる。以上のように、日下部 2008a では上記の (i) ~ (iii) に基づき、(A) ~ (C) 類の他動性は、(A) → (B) → (C) の順に低くなるということを示した。

本稿では、上に挙げた (A) ~ (C) 類の再帰表現の他動性の高低が、身体部位 N が主語の位置に立つ受身文である「身体部位 N + 被 + Na + VP」構文の成立の可否と関連しているという観点に基づき、分析を行う。

## 2. 受身文と他動性

現代中国語における受身文と他動性との関連について、木村 1992、1997 は動詞の意味と VP の形式から受身文の適性を考察しており、「主語に立つ対象が単に〈動作・行為〉を受けることを述べるだけでは成立し難く、対象が動作・行為の結果として被る何らかの〈影響〉を明示的に表現するか、或いは何らかのかたちでそれを強く含意するかたちのものでなければ成立し難い」（木村 1992:10）と述べている。即ち、動作（行為）による対象への結果性が明白に現れるものほど受身文への適性が強く、例えば、“打”、“杀”、“拆”などの動詞は、語彙的に結果を内包し、対象への影響を含意した「影響含意型」の動詞であるとしている。この影響含意型の動詞は、“\*小李被老王打”のように「裸」のまま用いられると成立し難いが、“小李被老王打了”[李さんは王さんに殴られた]（木村 1992:11）のように完了相の“了”を伴う既然の事態の場合は成立する。その一方で、VR 構造であれば、“我肯定会被她打死”[私はきっと彼女に殴り殺される]（同上）のように“了”を伴わない未然の事態を表すことができる。また、“拍”、“敲”、“推”などといった対象への接触行為を表す動

詞が“了”を伴う場合は、対象に及ぼす変化も部分的なものか、位置の移動に止まる程度のものであり、結果性・完結性に乏しいため、影響含意度も低くなり、“?? 桌子叫小李拍了”のように自然な文としては成り立たない。しかしながら、“桌子叫小李拍了两下”[テーブルが李君に二度叩かれた](木村 1992:12)<sup>6</sup>のように数量表現が付加されることによって成立する(木村 1992:11-12)。木村 1992、1997 は、数量表現が量的な限界を加えることによって動作に完結性をもたらし、具象性を与え、より具体的で個別的な行為像を描出させるため、「拍」類の動詞+ (了) + (一下) → 「打」類の動詞+ (了) → 「VR 構造」の順に受身文への適応度も高くなると述べている。即ち、木村 1992 は、他動性の高低は動詞の影響含意度や“了”や数量表現及び結果補語といった統語的な付加成分の有無と関連しており、そのことが受身文の成立の可否に影響を与えているとしている。

本稿では木村 1992、1997 の分析に基づき、他動性の高低や統語的な付加成分の有無が受身文の成立の可否に影響を与えるという立場を支持するが、統語的付加成分以外に、0 節で述べた人称の差異及びシチュエーションによっても影響されるということを明らかにする。次節からは、「身体部位 N + 被 + Na + VP」形式の表現において、1 節で挙げた (A) ～ (C) 類の再帰表現について、① “了”のみを伴う場合、② “了”及び数量表現を伴う場合、③ VR 構造を伴う場合をそれぞれ取り上げ、再帰表現の“被”構文への適性について考察する。

### 3. 「身体部位 N + 被 + Na + VP」における容認度

本節では、1 節で挙げた (A) ～ (C) 類の再帰表現を用いた「身体部位 N + 被 + Na + VP」形式において、上述の①～③の3つの形式をそれぞれ取り上げ、その容認度についてみていく。インフォーマントには、身体部位 N が動作主自身のものであると想定した上で、動作主が“我”と“他(她)”の両

方である場合について、「非文（＊）／かなり不自然（??）／やや不自然（？）／自然（無印）」のいずれであるかを判断してもらった。

### 3.1 (A) 類の動作（行為）

まず、(A) 類についてみる。

【剪指甲】(3-1a) 指甲被我 {<sup>?</sup> 剪了 / <sup>?</sup> 剪了三次 / <sup>?</sup> 剪短了}。<sup>7,8</sup>

(3-1b) 指甲被他 {<sup>?</sup> 剪了 / <sup>?</sup> 剪了三次 / <sup>?</sup> 剪短了}。

【刮胡子】(3-2a) 胡子被我 {刮了 / <sup>?</sup> 刮了三次 / <sup>?</sup> 刮好了}。

[髭は私によって剃られた (→ 髭を私は剃った)]

(3-2b) 胡子被他 {<sup>?</sup> 刮了 / <sup>?</sup> 刮了三次 / <sup>?</sup> 刮好了}。

【拔牙】(3-3a) 牙被我 {拔了 / <sup>?</sup> 拔了三颗 / 拔掉了}。

[歯は私によって {抜かれた / 抜かれてしまった}

(→ 歯を私は {抜いた / 抜いてしまった})]

(3-3b) 牙被他 {拔了 / <sup>?</sup> 拔了三颗 / 拔掉了}。

[歯は彼によって {抜かれた / 抜かれてしまった}

(→ 歯を彼は {抜いた / 抜いてしまった})]

【切手指】(3-4a) 手指被我 {切了 / <sup>?</sup> 切了三次 / 切断了}。

[指は私によって {切られた / 切り落とされた}

(→ 指を私は {切った / 切り落としてしまった})]

(3-4b) 手指被他 {切了 / <sup>?</sup> 切了三次 / 切断了}。

[指は彼によって {切られた / 切り落とされた}

(→ 指を彼は {切った / 切り落としてしまった})]

(A) 類は、動作主自身の行為により、自らの身体部位である対象が動作主から分離し、動作主とは別個のモノになっている。従って、身体部位の状態変化を伴い、対象の被影響度が高いため、話し手にとって観察可能であり、身体部位に視点を置きやすいことから、自然な文として成立しやすいと考えられる。仁田 1982:88 は、日本語の身体の一部を表すヲ格名詞について、「動作主本体

から切り離された独立した存在として把握されればされるほど、まものの受動を形成しやすくなる」と指摘しているが、現代中国語の受身文についても同様のことがいえそうである。

(3-1a)、(3-1b)において、2節で挙げた①“了”のみを伴う場合、②“了”及び数量表現を伴う場合、③VR構造を伴う形式は全てやや不自然であるが、この場合は文を補い、以下のようなシチュエーション、即ち場面を設定すれば、自然な文として問題なく成立する。まず(3-1a)、(3-1b)の“了”のみを伴う場合の例を挙げる。

(3-1c) 指甲被 {我 / 她} 剪了, 你看, 好看吗?

[爪は私によって切られたよ、見て、綺麗?

(→ 爪を切ったよ、…)]

(3-1c)は動作主が“我”の場合は自然であるが、“她”の場合はやや不自然である。しかしながら、身体部位Nに領属先をマークさせ、文を補うと、(3-1c)’のように成立する。

(3-1c)’ 她<sub>i</sub>的指甲非常漂亮, 可是昨天被她<sub>i</sub>剪了。

[彼女<sub>i</sub>の爪はとても綺麗だったのに、昨日彼女<sub>i</sub>によって切られてしまった (→ …昨日彼女は切ってしまった)]

(3-1a)、(3-1b)の数量詞を伴う場合である(3-1d)も、(3-1c)と同様に、動作主が“我”なら自然であるが、第三者である“他”ではやや不自然となる。この場合も、(3-1d)’のように身体部位Nに領属先をマークさせれば、自然な文として成立する。

(3-1d) 这星期指甲被 {我 / 他} 剪了三次。

[今週爪は私によって三回切られた (→ 今週爪を私は三回切った)]

(3-1d)’ 这星期他<sub>i</sub>的指甲被他<sub>i</sub>剪了三次。

[今週彼<sub>i</sub>の爪は彼<sub>i</sub>によって三回切られた (→ 今週爪を彼は



三回切った)]

(3-1c)、(3-1d) のように、動作主が“我”の場合は自然であるが、“他（她）”の場合ではやや不自然となるのは、ノーマークの場合は、当該身体部位を話し手自身のものと解釈してしまうためであると考えられる。仮にノーマークの身体部位 N を第三者である“他（她）”のものであるとするならば、話し手自身の身体部位ではないため、話し手は身体部位に対して再認識しなければならない。即ち、ノーマークであることから、話し手の視点はまず自分自身の身体部位に置かれるが、当該の身体部位は第三者である“他（她）”のものであることから、“他（她）”に再度視点を移した後、更に“他（她）”自身のものである身体部位へと移動し、そこから事態を描写しなければならない。従って、(3-1c)、(3-1d) のようなシチュエーションにおいては、動作主が“他（她）”の場合はやや不自然となるのである。しかし、身体部位 N に領属先がマークされている (3-1c)′、(3-1d)′ の場合は、身体部位がノーマークの時のように再認識を行う必要がないため、自然な文として成立すると思われる。

(3-1a)、(3-1b) の VR 構造のものも、下の (3-1e) のように具体的なシチュエーションを設定すると、動作主が“我”、“他”のいずれの場合も成立する。

(3-1e) 在 N 年前，{我 / 他} 的脚指甲是因为往肉里长，被 {我 / 他} 忍疼用剪刀伸入肉里剪掉了，但却将周边皮肤破坏引起发炎脓肿，……（インターネットからの引用を一部変更）  
[N 年前、{私 / 彼} の足の爪が肉の中へ伸びてきたので、痛みをこらえ爪切りを肉の中に入れ、{私 / 彼} によって切り落とされたが、周辺の皮膚が破れて炎症を起こし、化膿してしまい…  
(→ …爪切りを肉の中に入れ、切り落としたが、…)]

(3-2b) の“了”のみを伴う場合も、(3-2c) のように文を補うと自然となる。

(3-2c) 哎呀！他<sub>i</sub>变年轻了！胡子被他<sub>i</sub>刮了。

[あれ！彼<sub>j</sub>、若くなったね！髭が彼<sub>i</sub>によって剃られたんだ

(→ 髭を剃ったんだ)]

上の (3-2c) においては、前の文に“他”が存在し、シチュエーションにより“胡子”が“他”のものであると認識できるため、“胡子”がノーマークであっても自然な文となる。

次に、(3-2a)、(3-2b) の数量詞を伴う場合と VR 構造のもの、及び (3-3a)、(3-3b) の数量詞を伴う場合を見てみる。以下の (3-2d)、(3-3c)、(3-4c) は動作主が“他”のときはやや不自然であるが、その下に挙げた (3-2d)′、(3-3c)′、(3-4c)′ のように身体部位 N にその領属先をマークさせれば、自然な文となる。これも (3-1c)、(3-1d) と同様に、身体部位 N がノーマークであることによると考えられる。

(3-2d) 两天中胡子被 {我 / <sup>?</sup> 他} 刮了三次。

[二日間で髭は私によって三回剃られた (→ 二日間で髭を私は三回剃った)]

(3-2d)′ 两天中他<sub>i</sub> 的胡子被他<sub>i</sub> 刮了三次。

[二日間で彼<sub>i</sub> の髭は彼<sub>i</sub> によって三回剃られた (→ 二日間で髭を彼は三回剃った)]

(3-2e) 留了一个周的胡子今天早晨终于被 {我 / 他} 刮掉了, {我 / 他} 留胡子其实挺帅的, 可人见人说, 特别是昨天回老家, 父母也表示了他们的坚决反对的意见, 没办法, 刮了。

(インターネットからの引用を一部変更)

[一週間延ばした髭は今朝ついに {私 / 彼} によって剃り落とされた。{私 / 彼} が伸ばした髭は実は格好良かったのだが、人に会うたびに何か言われ、とりわけ昨日実家に帰ったら、両親も断固として反対したので、仕方なく剃った (→ 一週間延ばした髭を今朝ついに {私 / 彼} は剃り落とし、…)]

(3-3c) 一年中牙被 {我 / <sup>?</sup> 他} 自己拔了三颗。<sup>9</sup>

[一年間で歯は私自身によって三本抜かれた (→ 一年間で歯を私は自分で三本抜いた)]

(3-3c)' 一年中他<sub>i</sub> 的牙被他<sub>i</sub> 自己拔了三颗。

[一年間で彼<sub>i</sub> の歯は彼<sub>i</sub> 自身によって三本抜かれた (→ 一年間で歯を彼は自分で三本抜いた)]

(3-4c) 一天中手指被 {我 / ? 他} 切了三次。

[一年間で指は私によって三回切られた (→ 一年間で指を私は三回切った)]

(3-4c)' 一天中他<sub>i</sub> 的手指被他<sub>i</sub> 切了三次。

[一年間で彼<sub>i</sub> の指は彼<sub>i</sub> によって三回切られた (→ 一年間で指を彼は三回切った)]

(3-2e) は身体部位 N である“胡子”の領属先がノーマークであるが、後の文が存在することにより、動作主自身のものであると判断することができるため、動作主が“我”、“他”のいずれの場合においても成立すると思われる。

### 3.2 (B) 類の動作 (行為)

次に、(B) 類の例を挙げる。

【梳头发】(3-5a) 头发被我 {<sup>?</sup> 梳了 / <sup>?</sup> 梳了三下 / <sup>?</sup> 梳好了}。

(3-5b) 头发被他 {<sup>?</sup> 梳了 / <sup>?</sup> 梳了三下 / <sup>?</sup> 梳好了}。

【洗手】(3-6a) 手被我 {<sup>?</sup> 洗了 / <sup>?</sup> 洗了三次 / <sup>?</sup> 洗干净了}。

(3-6b) 手被他 {<sup>?</sup> 洗了 / <sup>?</sup> 洗了三次 / <sup>?</sup> 洗干净了}。

【刷牙】(3-7a) 牙被我 {<sup>?</sup> 刷了 / <sup>?</sup> 刷了三次 / <sup>?</sup> 刷完了}。

(3-7b) 牙被他 {<sup>?</sup> 刷了 / <sup>?</sup> 刷了三次 / <sup>?</sup> 刷完了}。

(3-5a) ～ (3-7b) は、やや不自然または成立する (3-1a) ～ (3-4b) とは異なり、2 節で挙げた①“了”のみを伴う場合、②“了”及び数量表現を伴う場合、③ VR 構造を伴う場合の全ての場合においてやや不自然である。

(B) 類の動作（行為）は、動作主から対象である身体部位に対する影響度が高く、身体部位に状態変化が生じる場合であるが、身体部位の形状または表面の状態が変化する場合であるため、(A) 類と比較すると、他動性が低い。しかしながら、話し手が当該の身体部位の被影響度に対して観察可能となるため、対象である身体部位に視点を置きやすくなる。従って、主語の位置に立つ対象に視点を置き、その対象に対してどのような動作（行為）が行われ、そしてどのような状態になったかということを叙述・描写する“被”構文の構文的機能と合致する。1 節で述べたように、(B) 類の身体部位の被影響度は部分的であるため、3.1 で考察した (A) 類よりも状態変化を観察し難いことから、動作主が“我”、“他”のいずれの場合も単文ではやや不自然となってしまうが、以下のように文を補えば自然な文として成立する。

まず、(3-5a)、(3-5b) の 3 つの形式を見てみる。下の (3-5c) は (3-5a)、(3-5b) の“了”のみを伴う場合であり、動作主が“我”、“他”のいずれであっても成立する。

(3-5c) {我 / 他} 的头发被 {我 / 他} 梳了, 手也被 {我 / 他} 洗了。

[{私 / 彼} の髪は {私 / 彼} によって梳かれ、手も {私 / 彼} によって洗われた(→ {私 / 彼} は髪を梳いたし、手も洗った)]

(3-5c) は動作主の身体部位である“头发”と“手”を対比した文である。話し手の視点は“我 / 他”の“头发”に置かれ、そこから“被 {我 / 他} 梳了”という事態を描写した後、“我 / 他”の“手”に移動し、“被 {我 / 他} 洗了”という事態を述べている。

下の (3-5d) は、(3-5a)、(3-5b) の数量詞を伴う場合であるが、(3-5c) と同様に、主語の位置にある“头发”に話し手の視点が置かれ、そこから事態を描写している。

(3-5d) 头发被 {我 / 他} 梳了三下, 就掉了一把。

[髪は {私 / 彼} によって三回梳かれると、(髪が) 一掴み落ち

た (→ 髪を {私 / 彼} が三回梳くと、…)]

(3-5c) と (3-5d) は、文を補うことによって場面が設定され、コトガラに具象性をもたせることができる。そのため、インフォーマントにとって場面を想像しやすくなり、容認度が高くなる。従って、動作主が“我”、“他”のいずれの場合も自然な文として成立すると考えられる。

更に、(3-5a)、(3-5b) の VR 構造の例を挙げる。

(3-5e) 头发被 {我 / 他} 梳好了, 走吧。

[髪<sub>i</sub>の毛は私によってちゃんと梳かれたから、行きましょう

(→ 髪をちゃんと梳いたから、…)]

(3-5e) は動作主が“我”の場合は成立するが、“他”ではやや不自然になる。しかし、(3-5e)’のように主語の位置にある身体部位 N にその領属先を明示すると成立する。

(3-5e)’ 他<sub>i</sub>的头发被他<sub>j</sub>梳好了。

[彼<sub>j</sub>の髪<sub>i</sub>の毛は彼<sub>j</sub>によってちゃんと梳かれた (→ 髪<sub>i</sub>の毛を彼はちゃんと梳いた)]

(3-5e) には“走吧”という聞き手に対して勧誘・提案をするフレーズが存在する。“我”の場合は、“头发”が“我”のものであると判断でき、聞き手のものと混乱することはない。一方、“他”の場合では、話し手と聞き手の他に第三者である“他”が存在していることになる。第三者である“他”がいると仮定すると、身体部位 N がノーマークであるため、このシチュエーションにおいては、“头发”を“我”のもので判断してしまい、身体部位 N が動作主自身のものであるという想定の下では、やや不自然になるという。従って、(3-5e)’のように身体部位 N に領属先をマークしたり、異なるシチュエーションを設定したりすれば、自然な文として成立する。

(3-6a)、(3-6b) の数量表現を伴う場合である (3-6c) と VR 構造のものである (3-6d)、及び (3-7a)、(3-7b) の 3 つの形式の (3-7c) ～ (3-7e) のよ

うに、これらも文を補うと、動作主が“我”または“他”のいずれの場合も自然な文となり、成立する。

(3-6c) 手被 {我 / 他} 洗了三次, 也没洗掉。

[手は {私 / 彼} によって三回洗われたけども、落ちなかった  
(→ 手を {私 / 彼} は三回洗ったけど、…)]

(3-6d) 手被 {我 / 他} 洗干净了, {我 / 他} 可以吃吗?

[手は {私 / 彼} によって綺麗に洗われたから、食べてもいい?  
(→ 手を {私 / 彼} は綺麗に洗ったから、…)]

(3-7c) 牙被 {我 / 他} 刷了, 所以 {我 / 他} 不吃了。

[歯は {私 / 彼} によって磨かれたから、食べないことにした  
(→ 歯を {私 / 彼} は磨いたから、…)]

(3-7d) 牙被 {我 / 他} 刷了三次, 可 {我 / 他} 的嘴还是有味儿。

[歯は {私 / 彼} によって三回磨かれたけれど、まだ匂いがする  
(→ 歯を {私 / 彼} は三回磨いたけれど、…)]

(3-7e) 牙被 {我 / 他} 刷完了, {我 / 他} 可以睡了吗?

[歯は {私 / 彼} によって磨き終わられたから、寝てもいい?  
(→ 歯を {私 / 彼} は磨き終わったから、…)]

(3-6c) では、「(手の) 汚れが落ちなかった」というフレーズがあることから、身体部位に対して観察可能であったことがわかる。そのため、上述のように、身体部位に視点を置きやすくなり、“被”構文の機能と合致することから、動作主が“我”、“他”のいずれの場合も自然な文として成立する。(3-6d) と (3-7e) は、動作主が“他”の場合は、例えば、兄または姉が、弟が「手を洗った」、「歯を磨いた」ことを母親に伝え、「(だから彼は) 食べてもいい?」、「(だから彼は) 寝てもいい?」と母親に尋ねている場面が想定できる。(3-7d) も (3-6c) と同様に“还是有味儿”というフレーズから、身体部位に対して観察可能であることが読み取れるため、“我”、“他”のいずれの場合も成立する。(3-7c) はイ

ンフォーマントによると、“{我/他<sub>i</sub>}不吃了”というフレーズがあることにより、「磨かれた歯の所有者」と「食べないと決めた動作主」が同一人物であるという解釈が優先して働くため、歯が動作主自身のものであるとスムーズに判断できるといふ。

### 3.3 (C) 類の動作（行為）

最後に (C) 類の動作（行為）についてみてみよう。

(3-8a) ～ (3-9b) の“了”のみを伴う場合と数量表現を伴う場合は、動作主が“我”、“他”のいずれの場合においてもかなり不自然であり、VR 構造のものは非文となっている。

【眨眼睛】(3-8a) 眼睛被我 {<sup>??</sup>眨了 / <sup>??</sup>眨了三下 / \*眨好了}。

(3-8b) 眼睛被他 {<sup>??</sup>眨了 / <sup>??</sup>眨了三下 / \*眨好了}。

【点头】(3-9a) 头被我 {<sup>??</sup>点了 / <sup>??</sup>点了三下 / \*点好了}。

(3-9b) 头被他 {<sup>??</sup>点了 / <sup>??</sup>点了三下 / \*点好了}。

(3-10a) ～ (3-11b) は“了”のみを伴う場合及び VR 構造のものは非文であり、数量表現を伴うものはかなり不自然である。

【歪嘴】(3-10a) 嘴被我 {\*歪了 / <sup>??</sup>歪了三下 / \*歪好了}。

(3-10b) 嘴被他 {\*歪了 / <sup>??</sup>歪了三下 / \*歪好了}。

【伸腿】(3-11a) 腿被我 {\*伸了 / <sup>??</sup>伸了三下 / \*伸好了}。

(3-11b) 腿被他 {\*伸了 / <sup>??</sup>伸了三下 / \*伸好了}。

(3-12a) ～ (3-13b) は、“我”、“他”のいずれの場合においても、①～③の3つの形式は全て非文となる。

【招手】(3-12a) 手被我 {\*招了 / \*招了三下 / \*招好了}。

(3-12b) 手被他 {\*招了 / \*招了三下 / \*招好了}。

【抱胳膊】(3-13a) 胳膊被我 {\*抱了 / \*抱了三下 / \*抱好了}。

(3-13b) 胳膊被他 {\*抱了 / \*抱了三下 / \*抱好了}。

上の (3-8a) ～ (3-13b) は 2 節で挙げた①～③の統語的な付加成分を加えたにも関わらず、全て不成立またはかなり不自然になってしまう。

“被”構文は、主語の位置に立つ対象に視点を置き、その対象に対してどのような動作（行為）が行われ、そしてそれがどのような状態になったかを述べる文である。(C)類は、身体部位の空間的位置の変化を伴う他動性が低い動作（行為）である。これに①～③の統語的付加成分を加えて、“被”構文が成立すると思われる形式にしてみたものの、動作（行為）の他動性が低いという意味的側面の影響により、成立しないことが明らかとなった。従って、動作主が“我”、“他”のいずれの場合に関わらず、非文またはかなり不自然な文になると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では、再帰表現を「身体部位 N + 被 + Na + VP」の形式にした際の、その適性について考察を行った。再帰表現においても、他動性の高いもの、即ち対象に対する影響度が高い動作（行為）ほど、“被”構文への適性が高いことが明らかとなった。また、その適性についても、統語的成分の付加や意味的側面が関連しているのみならず、人称やシチュエーションも影響していることを明らかにした。即ち、動作主が“我”と“他（她）”の場合を比較し、その容認度の差を挙げ、視点移動との関連から、“我”が動作主である方が自然な文として成立しやすいことを指摘した。動作主が第三者である“他（她）”の場合は、身体部位 N がノーマークの時はやや不自然となるが、領属先をマークしたり、文を補って場面を設定したりすれば自然な文として成立することを示した。

#### 注

<sup>1</sup> 「再帰」とは、動作主が自分自身に対して行う動作（行為）を指す。仁田 1982 : 80 は



これを「動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻ってくることによって、動作が完結するといった現象」と定義しており、本稿でもこの定義に従う。

<sup>2</sup> 「まものの受身」とは、所謂「直接受身」のことであり、「能動態において、ガ格以外  
の関係で動作や作用の成立に関与している成員が、受動化でガ格に転換させられる」(仁  
田 1982:82) ものを指す。例えば、以下の i)、ii) はまものの受身文を形成すること  
ができる。

i) 太郎が次郎を殴った。 → 次郎が太郎に殴られた。

ii) 犬は私に噛みついた。 → 私は犬に噛みつかれた。

<sup>3</sup> 中国語の“被”を用いた表現は、日本語の受身を表す「レル / ラレル」とは必ずしも  
一次函数的に対応するものではなく、“被”を用いた表現を日本語で表現する際に、「レ  
ル / ラレル」や動作主を導く「二格 / ニヨッテ句」を用いて直訳すると、不自然な日  
本語になってしまう場合がある。従って、本稿の例文訳は中国語を直訳したものと、  
それを自然な日本語にしたものをカッコ内に記してある。

<sup>4</sup> 「影響含意度」とは、木村 1992:11 によると、動作（行為）の完了を示すと同時に、  
結果としての対象への物理的ないし心理的な影響の波及を強く含意し得る性格の強さ  
をいい、これが強いものは影響含意度が高く、弱いものは低いとしている。

<sup>5</sup> 現代中国語における受身文のマーカ―として、“被”以外に“让”、“叫”、“给”が挙げ  
られるが、この3つは使役を表わす場合もある。従って、本稿ではインフォーマント  
に例文を「受身文」としてのみ理解させるため、受身の意味のみを表わす“被”を用  
いた「身体部位 N + 被 + Na + VP」形式のみを扱う。

<sup>6</sup> 木村 1992、1997 は、“被”、“让”、“叫”の3つの前置詞とした受身文を一括して「BEI  
受身文」と称している。この例文は“叫”を“被”に置き換えても成立する。

<sup>7</sup> 数量表現を伴う場合については、(3-5a) 以下のように数詞に“一”を用い、量詞を“下”  
とした場合の“一下”には、「一回」という具体的な動作（行為）の回数を表す場合と、「ち  
よっと」という曖昧な動作量を表す二通りの場合が想定できる。また、“两”を用いて  
“两下”とした場合も、具体的な動作（行為）の回数と「数回」という概数を表す二通

りが想定できる。よって、本稿では動作（行為）の具体性・完結性をより際立たせるために、数詞は全て“三”を用いた。

<sup>8</sup> 本稿の例文は作例及びインターネットからの引用を一部変更したものであるが、全てインフォーマントチェックを受けている。

<sup>9</sup> (3-3c) 及び (3-3c)' は、“自己”が挿入されているが、“自己”が無い場合は、「動作主自身の歯を動作主自身が抜く」と場合と、「動作主自身の歯を他人が抜く」という2つの解釈が生じてしまうという。本稿では、再帰表現を「動作主が動作主自身の身体部位に対して行う動作（行為）」と定義しているため、この場合は“自己”を挿入し、前者としてのみ解釈できるようにした。

## 主要参考文献

- 木村英樹 1992. 「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』6月号 内山書店
- 日下部直美 2008a. 「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V + 身体部位 N」の形式を中心に」『多元文化』8号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻
- 日下部直美 2008b. 「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V + 身体部位 N」の形式を中心に」『人文研究論叢』4号 星城大学
- 日下部直美 2009. 「現代中国語における“被”構文と主題文について——「V + 身体部位 N」形式の再帰表現を中心に」『人文研究論叢』5号 星城大学
- 澤田治美 1993. 『視点と主観性——日英語助動詞の分析』ひつじ書房
- 杉村博文 1984. 「処置と遭遇——“把”構文再攷」『中国語学』231号
- 杉村博文 1992. 「遭遇と達成——中国語被動文の感情的色彩」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』くろしお出版
- 仁田義雄 1982. 「再帰動詞，再帰用法——Lexico-Syntaxの姿勢から」『日本語教育』47号
- 廣瀬幸生 1997. 「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』研究社

- ウェスリー・M・ヤコブセン 1988. 「他動性とプロトタイプ論」 久野暲・柴谷方良（編）  
『日本語学の新展開』くろしお出版
- 木村英樹 1997. <漢語被動句的意義特徴及其結構上之反映> *Cahiers de Linguistique –  
Asie Orientale* 26 (1) : 21-35.
- 杉村博文 1998. <论现代汉语表“难事实现”的被动句>《世界汉语教学》第4期  
—— 2003. <从日语的角度看汉语被动句的特点>《语言文字应用》第2期  
—— 2006. <汉语的被动概念> 邢福义主编《汉语被动表述问题研究新拓展》第二辑  
华东师范大学出版
- 张伯江 2000. <论“把”字句的句式语义>《语言研究》第1期
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson 1980. Transitivity in Grammar and  
Discourse, *Language* 56:251-299.